

医療機関の復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応 ～医療機関へのヒアリング結果～

○村久木 洋一（障害者職業総合センター 上席研究員）

田中 歩・山科 正寿・依田 隆男・宮澤 史穂

1. 背景①

- 医療機関の復職支援プログラムにおいて発達障害特性のある利用者が一定程度存在し¹⁾ ²⁾ 対応に課題を抱えている。

- 「職場復帰支援の実態等に関する質問調査」（平成30年実施）より自由記述を抜粋

『発達障害の方を対象としたプログラムの提供が無い為に、グループワーク等で理解に差が出ることがある。』

『発達障害がベースの方が多く、うつ病のプログラムでは行動変容がおこりにくい。』

『発達障害（疑いを含む）の特性を有した利用者への適切な対応ができていない』

『多様化する休職背景・理由に対応しきれていない。（発達障害など）』

1)秋山 剛ほか：自閉スペクトラム特性を有する患者へのリワーク支援の手引きの作成と有用性調査「精神神経学雑誌120（6）」p.469-487,2018

2)海老澤尚：成人の発達障害専門外来とリワークプログラムの紹介「精神神経学雑誌117（3）」p.205-211,2015

1. 背景②

- 復職支援プログラムを実施している医療機関の中には、発達障害特性のある利用者を対象としたプログラム（発達対象プログラム）を実施している機関や発達対象プログラムは無いものの通常の復職支援プログラムにて発達障害特性のある者への対応を実施している機関が存在する³⁾。

2. 目的

発達対象プログラムを行っている医療機関の実施状況や、通常の復職支援プログラムの中で発達障害特性がある者へ対応している医療機関への調査を行い対応状況について把握する。

※本調査は、障害者職業総合センターで平成30年度から令和2年度にかけて実施している「職場復帰支援の実態等に関する調査研究」において実施されたものです。

3. 方法①

(1) 調査対象

2018年に開催された第1回日本うつ病リワーク協会年次大会にて、自機関の復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応について報告をしている医療機関6か所より、調査への同意が得られた3か所の医療機関を対象とした。

(2) 調査方法と調査時期

2019年10月に研究員2名が各医療機関を訪問し、半構造化面接によるヒアリングを行った。

3. 方法②

(3) 調査項目

ア 3機関すべてに聴取した内容

- ・ 復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応方法（発達対象プログラムの有無）
- ・ 全利用者における発達障害特性がある利用者の割合

イ 発達対象プログラムを実施している機関（医療機関A、B） に対して聴取した内容

- ・ プログラムの対象者
- ・ プログラムの目的、特徴
- ・ 個別プログラムの内容

ウ 通常の復職支援プログラム内にて発達障害特性がある者への 対応を実施している機関（医療機関C）に対して聴取した内容

- ・ 発達障害特性がある者への対応方針
- ・ 発達障害特性がある者への具体的な対応状況

4. 結果

医療機関Aの発達対象プログラム

項目	結果
全利用者における発達障害特性がある利用者の割合	約4割程度
プログラムの対象者	発達障害特性がみられるとの診断を受けた者
プログラムの目的、特徴	職業生活を送る上での「生きづらさ」を和らげるために必要な能力（①安定した就労を継続する能力、②業務を遂行するために直接的に必要な能力、③職場で周囲の人々に疎まれないようにする能力）を向上させる
個別プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ・文献講読（発達障害に関する論文や文献を講読しグループで感想や気づいた点について話し合う） ・グループワーク（発達障害に関するテーマ等を話し合う） ・コミュニケーション（グループで話し合い、実際にロールプレイ） ・TDL（Training at Daily Lifeの略。ADHD傾向がある場合の職場や日常生活の不適応について具体的な対処方法を学んで実践する）
その他の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・発達対象プログラムは第1ステップ「知る」（発達障害について理解する）、第2ステップ「気づく」（自分の特性を知り、職場や日常生活での出来事が自分のどのような特性が影響して起きていたのか、自分の得手・不得手に気づく）、第3ステップ「考える、訓練する」（対処法を身に着ける）、この3つのステップが設定されている。 ・発達障害の特性は利用者それぞれに異なり、職場環境や本人の今後のキャリアに対する考え方も異なることから、プログラムに加えて個別の支援も実施。

4. 結果

医療機関Bの発達対象プログラム

質問項目	結果
全利用者における発達障害特性がある利用者の割合	約3割程度
プログラムの対象者	発達障害の診断を受けている者、診断は無いが発達障害特性がうかがえる者等が混在。 ※プログラム実施中に心理検査を行い状態像を把握する。
プログラムの目的、特徴	利用者の自己洞察の促進とコミュニケーション能力の向上を目的としている（復職後の職場における行動の具体的なノウハウを獲得）
個別プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ・サイコドラマ ・SST
その他の特徴	グループワーク中の本人の発言でわかりにくい部分があれば、適宜本人に発言趣旨を確認し、それを翻訳して他のメンバーに共有するなど、コミュニケーションの特性を踏まえた対応を行っている。

4. 結果

医療機関Cにおける通常の復職支援プログラム内での発達障害特性がある者への対応

質問項目	結果
全利用者における発達障害特性がある利用者の割合	約4割程度
プログラムの対象者	担当医師から「発達障害特性があるため、発達障害特性に着目した支援の効果が見込まれる」との示唆が得られた者
発達障害特性がある者への対応方針	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフと利用者の中でプログラム利用に当たっての前向きな協力関係の構築が必須 ・スタッフが利用者の現状を「今はこれでよい」と承認することを重要視 ・スモールステップで共に復職に向けた対応を考えていく ・「自己理解」「特性理解を深める」ということを重視
発達障害特性がある者への具体的な対応例	<ul style="list-style-type: none"> ・認知行動療法における「考え方の癖」をキーとして自己理解を深める支援を実施。 ・プログラムにおける集団活動にて様々な価値観や考え方に目を向けることが可能になる。
その他の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・認知行動療法等において考え方の変化がみられにくい、もしくは理解が進まないように見える利用者がある場合には、その利用者に対して個別の支援も実施。 ・論理的説明で理解を促す、説明する際には発達障害者の視覚優位の特性を活用し図表やメモを使用する、といった対応が意識されている。

5. 考察

- 今回把握された復職支援プログラムにおける発達障害特性がある者への対応のポイントは以下のとおりである。

①自己理解、特性理解の促進

- ▶ 障害特性に関する学習や意図的に“気づき”を促進させる関わりを行うなど、自己理解に関しての支援に重きが置かれている傾向がある。

②個別対応、個別的な支援の実施

- ▶ 情報の受け取り方の特性や、理解のスピードなど個々人の特性に合わせた個別対応や個別的な支援が行われている。

③発達障害特性に合わせた対応

- ▶ 視覚優位の特性に合わせた情報の提示等、特性に合わせた対応が行われている。

④効果的な集団活動の実施

- ▶ 集団活動を重視している傾向がある。安心できる環境で集団の再体験を行い、集団のポジティブな面が感じられるような狙いをもって実施されていた。¹⁰